

講座

中世文学概論

—和歌・連歌・説話について—

姫野 敦子

中世文学の流れについて、ジャンル別に述べる。今回の講座では和歌、連歌の韻文の流れと、説話・軍記の散文の流れについて述べた。

日本の古典文学の時代区分として、中世と言った場合、その始まりと終わりがいつであるかに関しては定説を見ない。歴史区分でいうところの平安時代の後半（院政期）と、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、安土桃山時代にあたりと大まかには言えるが、文学上の変化は、政治的な動きとは重ならず、ずれながら推移していくというのが常識的見解といえるだろう。ただ、文学ジャンルによって、中世的な要素の萌芽が見られる時期が違う。それぞれのジャンルの作品の解説を通じて中世文学とは何か、中世文学の中世文学たる所以を考えたい。

まず、和歌についてである。中世的な和歌の萌芽は、院政期に活躍した源俊頼・藤原基俊という二人の歌人からといってもよいであろう。この二人の対立はしばしば説話化されている（『無名抄』など）。

源俊頼は、革新的な歌風の歌人で、それまでの和歌ではあまり詠まられなかった言葉如歌語として和歌に取り入れた人物である。白河上皇の下命で『金葉和歌集』の撰者となったが、完成した和歌集は上皇に受け入れられず、編纂を二度やり直すこととなった。一方、藤原基俊は、一種の古典主義をとりながら、古い歌語を意識することによって、和歌の美的表現を追求し、幽玄や余情という意識を詠歌に生かしていった。

この二人の重鎮が亡くなったあと、中世歌壇は歌道家である六条藤家、御子左家両家のせめぎ合いによって進んでいく。まず主導権をとったのは、六条藤家である。六条藤家の顕輔は、崇徳上皇の下命で勅撰集『詞花和歌集』を撰した。次いで、子息の清輔は、二条天皇より下命を受け、『続詞花和歌集』を撰したが、天皇の崩御によ

り奏覧が叶わず、勅撰とは認められなかった。六条藤家は歌学に精通した家であり、頭輔の知識は、清輔の『袋草紙』や顕昭の『袖中抄』などの歌学書へと引き継がれたが、その歌風は、故実にこだわりの伝統的な和歌の範疇をなかなか出られないものであった。一方で、俊成を初めとする御子左家一派は、撰閑家の九条家との関わりのなかで歌壇での位置を占めつつあった。俊成は後白河院から下命されて『千載和歌集』を撰進した。『千載和歌集』は治承寿永の乱での源平の戦いに都の人々が翻弄される中で作られ、後の『新古今和歌集』に大きな影響を与えた。九条良経主催の『六百番歌合』などでの俊成の判詞は、俊成の美意識を象徴するものであり、幽玄や艶といった言葉が頻出し、新古今風の歌風形成に寄与した。

『千載和歌集』が作られた後、歌壇の中心となっていたのは、治天の君となった後鳥羽院であった。俊成に心酔した後鳥羽院は、『新古今和歌集』の編纂に自ら関わり、撰者の選定、奏覧後の切継ぎ（再編集）などを行った。承久の乱で隠岐に流された後も編集作業は続けられ、「隠岐本」と呼ばれる『新古今和歌集』の一伝本を残した。

一方、『新古今和歌集』の撰者の一人となったものの、承久の乱にかかわらなかつた定家は、御子左家の歌壇での地位を固め、後堀河天皇から下命され『新勅撰和歌集』を撰進し、以後、勅撰集の撰者は、ほぼ定家の子孫である御子左家が独占することとなった。しかし、その立場は、政治の動向に左右されることもしばしばあった。例えば、定家の息子である為家は、一度は『統後撰和歌集』という

勅撰集を単独で撰進したが、当初単撰のはずだった『統古今和歌集』では鎌倉幕府の威を借りた真観の横やりがはいり、複数で撰進することになった。失意の為家は、ほとんど撰に関与しなかったという。

為家の息子の代から、御子左家は、嫡男の為氏を祖とする二条家、為教を祖とする京極家、為家後室の阿仏尼の子である為相を祖とする冷泉家の三家に分裂した。このうち、勅撰集撰者を多く歴任するなど鎌倉時代の歌壇の主導的な立場であったのは平明な歌風をもつぱらとする二条家であった。一方で、天皇家は両統迭立の時代を迎え、大覚寺統の天皇には二条家、持明院統の天皇には京極家が近侍する状況であった。京極家の京極為兼は、持明院統の伏見天皇の東宮時代から近臣として仕え、伏見天皇の周辺の人々にとつても歌道の師範的立場であった。為兼は治天の君となった伏見上皇の勅を受け、『玉葉和歌集』を撰した。その歌風は京極派ともいわれ、「ことば」よりも「心」を重視し、光の変化を实景に即して詠むなど清新な歌風であった。一方で『玉葉和歌集』は、その表現の斬新さから守旧派の二条家から批判を受けている。為兼・伏見上皇の死後、南北朝時代に光厳院撰の『風雅和歌集』が作られるが、以後京極派が撰した勅撰集は作られなかった。

南北朝時代には、北朝において勅撰集の催しがあり、『風雅和歌集』『新千載和歌集』には南朝の歌人の詠歌は撰ばれなかった。彼らの歎きを受けて、後醍醐天皇の皇子で二条家出身の母を持つ宗良親王が南朝の詠歌を中心に撰んだのが『新葉和歌集』であり、准勅撰とされた。『新葉和歌集』は平明な二条派の歌風の和歌が多いが、戦乱

の時代を映す旅の歌に特徴がある。

室町時代には、勅撰集を催す場合、幕府の意向を無視することは出来ず、まず、足利将軍による武家執奏を天皇に行い、その後、撰者に下命される慣例となった。二条家の血統が絶える中、足利義教による武家執奏が後花園天皇に行われ、二十一番目の撰集の下命が飛鳥井雅世へなされ、『新続古今和歌集』が撰進された。飛鳥井家にとつては、『新古今和歌集』の撰者雅経以来の荣誉となった。その後、勅撰集の計画はあったものの、応仁の乱による混乱の中、実現されることはなかった。その後、連歌が隆盛していく一方、和歌は一種の硬直化の様相を呈する。古今伝授などの秘説を誇示することによって和歌の権威を保とうとする動きが、江戸時代初期まで見られた。その役割を担った一人が、連歌師の宗祇であり、彼は『古今和歌集』『源氏物語』などの古典に精通し、東常縁より古今伝授を受け、三条西実隆へ伝えた。その流れは、細川幽齋へとつながっていった。

次に、連歌について述べる。連歌は和歌から派生した文芸であり、元は和歌の三十一文字を上句、下の句に分けた二人の唱和で終わる短連歌から始まったが、後には鎖連歌（長連歌）が主流となり、「座の文芸」ともいわれ、十数人の人々が式目（連歌の規則）に従い、百韻を巻いていく（詠んでいく）のが定型となった。

連歌を行う人々にとつて、連歌のはじまりとされるのは、『古事記』にある倭建命と御火焼之老人との唱和であり、この歌にちなんで連歌のことを「筑波の道」というようになった。平安時代後期には、『金葉和歌集』に連歌の部が作られ、鎌倉時代初期には、後鳥羽院が和

歌と共に連歌を愛好し、有心無心連歌（和歌的で雅な有心の句と滑稽な無心の句を交互に付け合う連歌）が流行した。鎌倉時代を通じて連歌は行われてはいたが、連歌集として初めて准勅撰となったのは、南北朝時代に二条良基が撰んだ『菟玖波集』である。二条良基は正風連歌（和歌的な情趣の連歌）を推進する一方、鎌倉時代から作られていた連歌の式目を整備し、応安年間に『応安新式』を作った。その後を受け、『新撰菟玖波集』を撰じた連歌師の宗祇は、古典学者としても名をなし、さらに正風連歌を推進した。一方で、室町時代の後半には漢語を詠みこみ、滑稽な要素の多い俳諧連歌が始まり、山崎宗鑑が編纂したとされる『犬筑波集』や『竹馬狂吟集』（编者未詳）に集められ、江戸時代に流行する俳諧への橋渡しとなった。

次いで、説話について述べていく。「説話」という言葉は、平安時代の「随筆」のように、近代になって付けられたジャンル名であり、「説話」を語り、編纂するという意識は、中世の人々には無かったと思われる。たとえば、現在、「説話集」と呼ばれる作品は、作品名の末尾に「物語」「談」「抄」「集」などの語が配されることが多い。これは、編者の意識が同様ではなかったことを示している。しかし、後世から見た説話集と思われる作品は、おおむね短編を集めて作られている。しかも編者の意識としては「事実を語っている」という立場にあるのが特徴である。たとえば院政期の代表的な説話集である『今昔物語集』には、地名や人物名の入るべき場所が空欄となっている箇所がある。編者は、ゆくゆく正しい情報を補おうとして、空欄のままにしたと思われる。これも事実への志向のあらわれとい

えるだろう。

事実を語ろうとする志向の先には、聞き手がいる。説話集はその聞き手が何を求めているかによって、内容を変え、語り方を変えていくのである。

平安末、院政期においては、先に出た『今昔物語集』よりも『江談抄』(大江匡房談)、『中外抄』『富家語』(藤原忠実談)などがよく知られており、その内容は貴族の有職故実などの聞き書であった。貴族として宮廷で振舞うためには、儀式書ばかりでなく、こういった聞き書から知識を得ることが必須となる。聞き書は必ずしも整理されてはいないが、時にお行儀の説明を越えた宮廷の歴史、ゴシップなど貴族生活の裏面を伝えるものとなっていた。

この傾向を中世において受け継いだのが源頭兼の『古事談』である。『古事談』は説話集につきものの評語が少なく、語り口が淡泊であることが特徴である。これは、巻頭話に称徳天皇の醜聞ともいえる話を配することなどからも、編者頭兼のドライな性格を反映していると考えられる。それに対して、編者未詳の『続古事談』は『古事談』とは、編者の性格が異なり、巻頭話に一条天皇の仁政の話を配するなど、儒教的政道観の見られる説話を多く収録する。編者の観点の違いが作品全体の違いに反映した例といえよう。

また、鎌倉時代には、平安の王朝時代を懐かしむ気運があり、『古今著聞集』『十訓抄』が作られた。『十訓抄』は、その序によると、少年の「心をつくる便り」とするために作られた教訓的説話集ではあるが、内容には、内裏をはじめとする貴族社会での振舞い方の善

し悪しを伝える話が多く含まれている。『十訓抄』の編者は「六波羅二藤左衛門入道」と呼ばれる実名不詳の人物であるが、おそらく貴族社会の末端において如何にふるまうべきかを見つめていたのであろう。

『宇治拾遺物語』は、編者不詳の説話集で、先行する源隆国の『宇治大納言物語』を受け継ぐものとされている。『宇治拾遺』の序文には『宇治大納言物語』の成立背景が語られ、都の郊外でさまざまな階層の人々の話を収集している様子が描かれている。その姿勢をも『宇治拾遺物語』は受け継ぎ、内容も「こぶ取り爺」など民間伝承につながる話が入っている。ただし、『今昔物語集』と共通する類話が多いものの、直接の書承関係はないとされている。

また、聞き手への意識が非常に明確な説話集として、仏教説話集がある。古く、『日本霊異記』や平安時代成立の各種の往生伝、『今昔物語集』がすでにできており、中世の仏教説話集の始まりは、すこし毛色の変わった『宝物集』であった。編者は平康頼であり、『平家物語』巻二にも描かれる鹿ヶ谷事件の首謀者の一人である。短編が連なる説話集というよりは、歴史物語的な枠組みを構え、康頼らしき人物が嵯峨清涼寺へ参籠するエピソードが冒頭に配される一方、天台浄土教の仏教観が、成仏に至る階梯の項目毎に例話、釈教歌などを交え、わかりやすく描かれている。教化の場での素材として執筆当初からよく読まれたらしく、一巻本、二巻本、三巻本、七巻本など伝本が非常に多いことが特徴である。

教化を目的とした往生伝や『宝物集』の仏教説話集的性格を受け

継ぐものとして、鴨長明の『発心集』があり、『方丈記』で自らの発心遁世を描いた長明はこの説話集で他者の発心遁世を描こうとした。真の発心・遁世とはどのようなかを語るために、僧の世界からの僧の遁世までも描いているのが特徴である。また、『発心集』に対して従来の往生伝との重なりが多いと批判している『閑居友』は入宋僧の慶政が編纂したものと考えられる。高貴な女性から依頼されたらしく、下巻には、女性の発心が描かれている話が集められている。

また、この時代、都から遠く離れた場所にも、仏教教化の場を見いだす人々がいた。尾張在住の僧、無住道暁が編纂した『沙石集』は、砂から砂金を見出すように、石から玉を見出すように、農民や漁民などの庶民の暮らしを描く中に仏の教えを見出そうとした説話集である。

次に軍記についてである。「軍」は「イクサ」の意であり、平安時代においてはイクサは鄙という都から遠く離れた場所で行われ、官人の報告書的な軍記『将門記』などが成立していた。都にイクサが戻ってきたのは保元の乱の時である。政治犯の死刑（源為義）を伴うこの戦いは都人に衝撃を与え、慈円の『愚管抄』において「ムサノヨ」の始まりとされ、後に『保元物語』に描かれた。この物語では平清盛は源義朝とともに後白河天皇・忠通側につき、源為義は崇徳上皇・頼長側について対立、結果的に崇徳上皇側の敗北に終わった。上皇の配流・客死という衝撃的事件で終わるこの物語は、イクサの物語である一方、敗者の視点も重みを持って記されており、軍

記というジャンルの特徴ともいえよう。

続く『平治物語』は後白河天皇の近臣同士の対立が発端となって起こった乱について描かれている。序文には儒教的政道観を持つ作者の傾向が表れ、藤原信頼の無能さ、信西の有能さが対比的に描かれ、優秀な臣下を用いる徳のない後白河院への批判が背後にある。戦いの描写ばかりでなく、敗者側の源義朝の遺児である、頼朝、義経のその後についても詳しい。

平家の滅亡を描いた『平家物語』は大きく三部に分かれ、第一部が平清盛、第二部が源義仲、第三部が源義経を中心に描かれ、背景には仏教的無常観がある。中心に描かれる人物は、序文にいう「盛者必衰」を体現した人物ともいえよう。数多く伝わる『平家物語』の諸本は大きく分けて、語り本系と読み本系にわかれ、語り本系はさらに一方系と八坂系に分けられる。『平家物語』の代表的伝本とされる寛一本は一方系と考えられる。読み本系は、延慶本、源平盛衰記などがある。原『平家物語』がいつごろ成立したかについては、説が確定しない状況である。読み本系が語り本系よりも古い形であるという説が主流であったが、平成になってその説が覆された。

また、『太平記』四十巻は鎌倉幕府の滅亡から南北朝の争乱、足利幕府内の対立が描かれた軍記で、成立当初から改変が行われていた様子が、今川了俊の『難太平記』などだろうか。大きく三部に分かれるが、儒教的政道観に基づき、権力者の君主としての徳の有無によって政権が動いていく様が描かれる。作者としては小島法師『洞院公定日記』玄恵『難太平記』などが挙げられているが、

内容からは複数の作者が想定できる。

『太平記』より後にも軍記（室町軍記）は続々と作られたが、そのなかでも後代への影響という点から注目すべきは、『義経記』と『曾我物語』である。どちらも史実をきちんと描写するというより、伝説の集大成という側面が大きい。

『義経記』は八巻あり、源義経が主人公ではあるが、『平家物語』における活躍は描かれず、その前後の苦難の時代が詳述される。義経が東北に下り、すぐに京都で軍略を学ぶさまは、時系列の合理性よりも伝説の面白さの重視のあらわれであろう。また、『平家物語』ではあまり活躍の描かれなかった武蔵坊弁慶がクローズアップされていることも、後代の御伽草子へとつながる特徴といえよう。

また、『曾我物語』は源頼朝の近臣工藤祐経に対する曾我十郎・五郎兄弟の仇討ち事件を描いたもので、後世の能や歌舞伎の題材としてしばしば取り上げられている。たとえば、能でいえば「小袖曾我」「夜討曾我」があり、歌舞伎では「助六」や「雨の五郎」などが曾我物とされている。『曾我物語』の題材となった事件自体は私的な恨みから出たものであるが、悲劇的な死を遂げた兄弟は御霊信仰と相まって、伝説が多く作られたと考えられる。伝本は真名本と仮名本に大きく分かれるが、その差は大きく、唱導や巫女などさまざまな作者が成立にかかわったと考えられる。

以上、中世文学の諸相を述べてきたが、和歌と政治とのかかわり、説話と聞き手の関係、軍記と伝説との関わり合いなど、問題点がさまざまなに設定できることが、中世文学の特徴といえるだろう。

参考文献

- 『中世の文学』（日本文学史3、有斐閣選書）久保田淳・北川忠彦編、有斐閣刊、1976年
『中世日本文学史』（有斐閣双書）有吉保編、有斐閣刊、1978年
『日本文学史必携』（別冊国文学N093）久保田淳編、學燈社刊、1992年